

第7期, 第8期モニター・アンケート 調査結果の報告

学会誌の発行をはじめとするOR学会の活動はいかにあるべきか? この多目的問題に対する少なくともフィジブルな解を求めて, 学会関係者は各担当部門で努力をつづけています。しかし, 他にも仕事をもちながら学会活動に加わっていると, とすれば短期的な仕事にとらわれて, その活動に対する評価も1人よがりなものになりがちです。

モニター制度は, OR誌の内容, 特に特集記事の内容; ならびに, そのほかのOR学会の諸活動について,

広く学会員の意見を収集してこれを学会活動の改善のための資料とすることを目的として, 昭和55年度に設けられました。以来, 半年の任期を原則にモニターを募り, 毎月OR誌の内容についての質問を中心としたアンケートに答えていただくとともに, 研究発表会開催時にモニター会議を開き, 学会活動について自由に討論していただいています。

皆様からいただいたご意見は, 毎月のOR誌の編集会議; 研究発表会の準備と反省; 研究部会, 定例講演会,

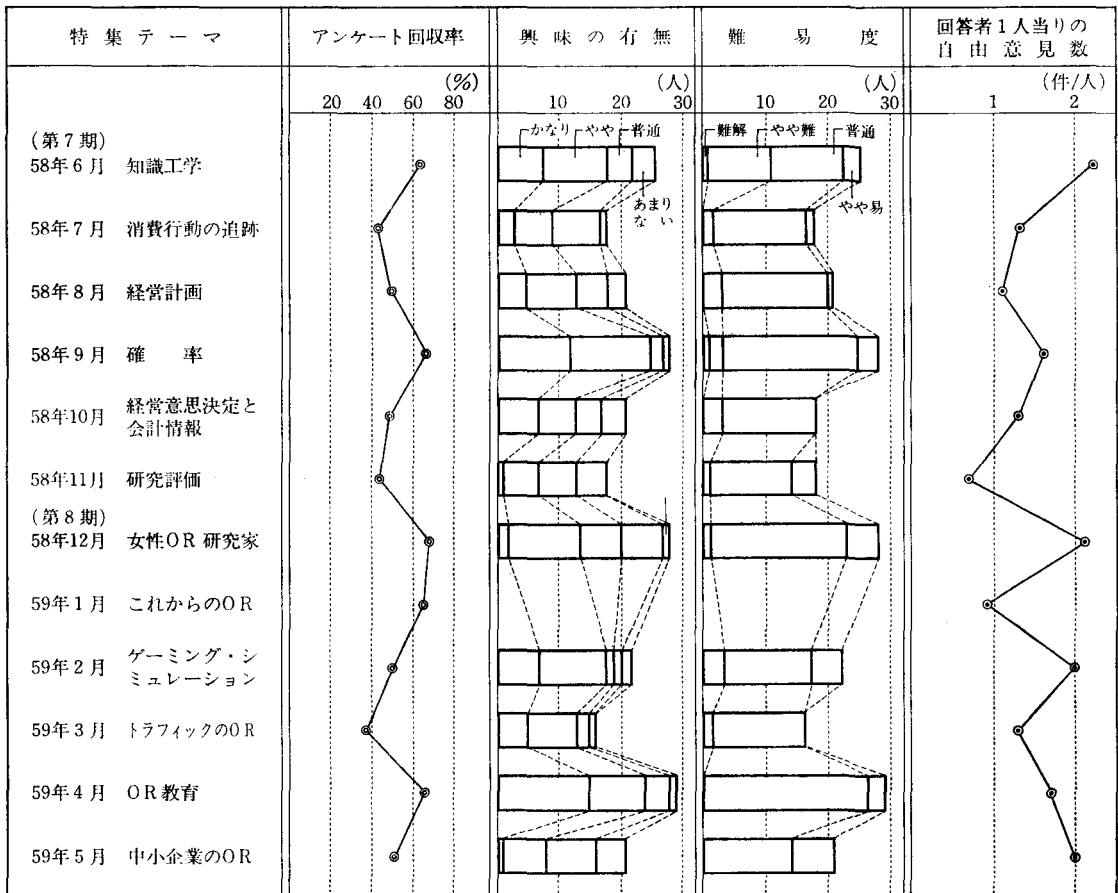


図 1 特集記事に対するアンケートのまとめ

シンポジウム、ORセミナー等の運営の資料として役立っていますし、各回のアンケートのまとめ、集約結果は理事会、委員会などで必ず報告されています。そして、ご意見のうち根拠があり、かつ可能なものについては、すぐに実行に移すようにつとめています。さらに、昭和57年度にまとめられたOR学会創立25周年記念長期計画の立案に当ってはモニター制度がたいへん有用でした。

また、モニターに回答すべき項目については次の方法でモニターと一般学会員とにフィードバックすることにしております。

- (1) “モニター小委員会からのお知らせ”として毎回モニターに返送するアンケート集約結果の最後に記述する。
- (2) 研究普及委員会で検討したのちに各モニターに連絡する。
- (3) 関係各委員会で検討したのちにモニター、学会員に連絡する。
- (4) OR誌編集後記欄で学会員に知らせる。
- (5) OR誌の記事にまとめる。

以下では、大変遅くなりましたが、昭和58年度後期と59年度前期、すなわち、第7期、第8期のモニター・アンケートの調査結果についてご報告いたします。

まず、最近のOR誌の特集記事についてのご意見をまとめたものを図1、図2に示します。図1は毎回のアンケートで答えていただいている意見をまとめたもので、アンケートの回収率、自由意見の数などかなりのばらつきが見られます。また、図2は過去の特集記事に対する印象をとりまとめたものです。関連する意見のうち主要なものは次のとおりです。

- より狭いテーマについて詳しい記事をのぞむ。
- 実務に役立つものをなるべく数式を使わないでわかりやすく説明してほしい。
- 特集記事に特有の用語の解説を掲載してほしい。
- 特集記事に関連するテーマで座談会を掲載してほしい。
- 各研究部会、研究グループが中心となって特集記事をまとめるかどうか。
- 研究発表会と特集記事との関連を密にしてほしい。

次に、最近の連載記事についてのご意見をまとめたものを図3に示します。これは各期のモニターの約半数の方のご意見をまとめたものですが、皆様はこれを見てどのような感想をもたれるでしょうか。連載記事に関する

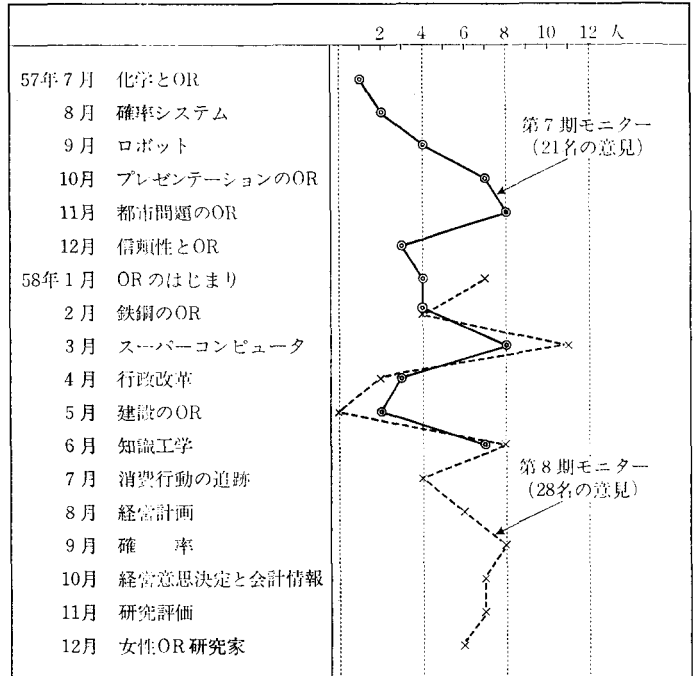


図2 過去の特集テーマで興味をもったもの

モニターのご意見には次のようなものがあります。

- 例題を中心としたOR手法の解説記事をのぞむ。
- 新しいOR手法の紹介をのぞむ。
- 各分野の理論や方法論が発達してきた過程や裏話について連載があるとおもしろい。
- そのほか、論文誌や研究発表会、定例講演会などについてもさまざまなご意見が集まっています。
- 各専門分野に固有の問題をOR手法で解いた結果は他の学会で発表され、OR学会論文誌に投稿されないことが多い。これは、今後のOR学会にとって大きな問題である。
- 研究発表会でのペーパー・フェアについては会場の状態や発表者、参加者の態度など再考の余地がでてきている。
- 研究発表会で Tutorial Session があるほうがよい。
- サーベイ、文献紹介記事を充実させてほしい。
- 研究部会、グループの成果をOR誌に発表してほしい。
- 常設研究部会の設置；学生論文賞の創設には賛成である。
- 講演会、セミナーでは実務家むきのテーマと純粋に理論的なものがあつたほうがよい。
- 講演会、セミナーの内容を誌で紹介してほしい。また、参加者の声も掲載してほしい。

	読んだ回数			興味の有無			有用性		
	10	20	30 (人)	10	20	30 (人)	10	20	30 (人)
ORワーカーのための 企業会計基礎講座 (54年11月～55年10月)	毎回 ときどき 読まない			有 無			有 無		
パーソナルコンピュータの ベーシック (56年1月～56年6月)									
マトロイド理論の基礎 (56年7月～57年6月)									
APLとOR (57年8月～58年3月)									
行列表現による重回帰分析 (58年9月～12月)									
経済データの時系列 分析と予測 (59年2月～59年5月)	毎回 読まない ときどき			有 無			有 無		

図 3 過去の連載記事に対する意見のまとめ 第7期モニター28人の意見 第8期モニター22人の意見

以上、第7、8期のモニターのご意見をまとめて紹介させていただきました。他にもOR学会の諸活動についてご意見がありましたら、自由に学会事務局までお寄せください。また第10期のモニターに対する自薦、他薦についてもよろしく願いたします。(研究普及委員会)

〔第7期モニターの方々〕

稲場日出男、今井良夫、岩根 正、宇土正浩、江藤 肇、遠藤 靖、大野友義、岡野宗十郎、加藤一郎、栗原英次、紺野功一、近藤忠彦、進藤 晋、田畑吉雄、高橋雅子、高梨敬子、中村 理、中川裕彦、浜 民夫、松村茂行、

水野秀昭、南 次郎、望月 徹、山崎源治、若林信夫、宮村郁子

〔第8期モニターの方々〕

有菌育生、伊藤和憲、井上芳信、大内 東、栗田 治、鈴木久敏、鈴木康彦、下郷太郎、高橋行雄、滝沢靖男、田中 實、知沢清之、寺田光男、戸田一夫、鳥辺晋司、行方常幸、長谷川 淳、浜岡 尊、原 亨、日比野康文、福田温夫、細井良三、堀 良、堀田健治、増井忠幸、三重野博司、嶺野幸子、武藤滋夫、柳 繁、若林信夫、脇田修躬

● ミ ニ ● ミ ニ ●

● O ● R ●

「理」と「智」

大乘仏教に2つの柱がある。その1つは、この世のものは、すべて実体がない、空である、したがって、生ずることも滅することもなしとする仏の智慧、つまり般若の世界である。もう1つは、そうした実体のない現実の世の中でいかに考え、行動すべきかという人間の智慧に視点をおくものである。衆生も、この世で修業を重ねることによって、そのまま、仏の境地に達することができる、いわゆる即身成仏を説く、現実の世に生きるための実践哲学である。

仏の智慧、つまり、理想の世界が「理」である。理念、物事の本質、理論的側面であろう。「智」は、この世に生きようとする衆生の実践の世界である。即身成

仏の思想は、理想、理論の世界と、現実、実践の世界が1つに融合し得ること、その接点に人間そのものがあることを示している。理想の世界が別個に存在し、この世は、その不完全な反映にすぎないとしたプラトン哲学の流れをくむ西洋思想では、理想と現実、理論的思索と実践は別個のものであるとして、中世まで神学に絶対的価値をおいた。仏教の世界では、理想と現実、理論と実践は、一体化したシステムである。ORワーカー、エンジニアの生産現場に密着したかかわりあい方、SQCから全員参加のTQCへの発展、定着などわれわれの意識の深層には、こうした意識が流れているのではなからうか。(山下 達哉)